

茫洋たる人間性

——藤原了然先生のこと——

高橋良和

かけて随分はなしをしたものである。

自分のことを申して恐縮であるが我ながら感情の起伏が多いと思っている。これも作品を書く上に必要な爆発力のあらわれとあきらめている。他人さまには、おこりっぽい男だと思われているのは、百も承知である。ところがそんなわたしと対照的に、逝った藤原了然先生は、実に温厚な、そしてはげしいことばひとつ発しない、まことにおだやかな人であった。

もうあれこれ五十年に近い、佛大の前身の佛教専門学校に入学してからである。それも京阪電車の宇治駅という支線であつた。いっしよに通学したのである。

当時は、中書島という本線の停留所で、宇治線に乗り換えしたので、何分時間も二十分ぐらいあつたから、二人で腰を

同窓の異色ある人は、割合いに早く逝った。伊東信海、藤浦慧巖、加藤真瑞などの学人や名刹の方丈は、わたしたちより十五年も二十年も前に逝っている。どうしたわけか、生き死にだけはしかたのないことである。もちろん異色というと、傑出したということにとつてもらつてもよいが、それだと今日生きている同窓は、凡人かとなると申しわけないが、とも角も、同窓として学生時代も嘱望されてそれぞれの道を早く進んだ人であらう。

藤原了然先生は、そのなかでもピカ一で、二クラスあつたそのクラスの全員から、大きな期待を背負つた人であつて、「この人こそ将来学者として」の声があつた。

本人は非常に茫洋な風格の持主で、あんなにいっしょに通ったのに、学校の授業のこと、研究のこと、あの試験の最中でさえ、電車のなかで教科書やノート類をひもとくことなかったのには、不思議に思っている。

わたしなど電車のなかで、ノートをみてその問題のヤマをはっているのに、この人はすやすやと寝ていたのには感心した。

なんという男や、と思ったが、それだからといって学校では、寄宿舎でいつも碁盤に向って烏鷺の戦いをやっていたのが、まだ昨今のように目につく。のん気ものの部類であってコセコセしたことは、微塵にも考えていないのであろう。やっぱりスケールが大きかった。

なんでも問題をもっていくと、いや、とはいわなかったが、結局問題の結論をその本人に出さして、

「それでよいと思うな、そうしたほうがいいよ。」
というのが、了然先生のことばである。

そんなことなら相談しなくてもわかっていて、と思うことがあったが、それをこの了然先生の胸を借りると、ほっとさせてくる人柄が、なにかしら寄りどころをもったという、いわゆるたより由斐のある人といえる。

酒のことは、わたしが書かなくても、他の人が書くだろう。その方面の思い出が多いのも、やはり本人のあの抱擁力であろう。

「おい、ちょっと彼岸にはなしをしにきてくれ。」

と御本人よりの電話があった。もう十三、四年前である。

「いやだよ、お寺で老人のはなしなどは、ごめんだ。」
というと、

「そんなこというな、お寺ではなしもけいこしておくといひぞ、ぼくのところでけいこせいよ。」

という返しことばである。

普通なら「なにをっ」というところだが、親友と平素のつながりで、

「それなら、けいこさせていただきます。」

とていねいに皮肉くって電話で返事して出かけるようになった。年三回のお寺の仏事には、必ず出かけている。多分よることでもらっている、自負しているが、ひよっとすると「どうや大分けいこ出来たやろ」と笑っていたかもしれないが、あの二人だけのひとときに五十年の交友のあたたかさを感じた。わたしが病気で京大病院に入院した。そして百日間の病院生活を終えて、八月十二日に退院すると、了然先生は、その翌日から国立病院に入院したのである。

とくに親友でも病気のリレーだけは、ごめんである。そして見舞いにいったとき、わたしは足の神経の回復がおくれて、歩きにくく杖をついていたのに、了然先生は顔面の手術で、眼帯はしていたが、歩くのは別に心配がなかった。

「うまいこといかわ。歩けないのはつらいよ。」

というと、

「いや、ぼくのもつらいぞ。」

といったが、あの笑いがとても淋しそうであった。

そして何回かの手術のあと、病気がかなり重いようであった。

そのとき病院から、鉛筆書きの便りがきた。

「退院されておめでとう。そしてお見舞ありがとう。おかげで手術も無事終ったが、君よりぼくのほうが悪人であることがわかった。」

とあった。自分の病気の重さを知っていたのであろう。

悪人ということばを使っているところに、了然先生の心がわかるようであるし、その悪人を病気克服の心として、悪人なお生るのあの法然上人のことばに生きている了然先生を思うと、その人間性がわかるようである。

亡くなってから、肩をおとして五十年前のことを毎日思い出している。

(たかはしりょうわ 文学部教授)

